

研究実施責任者	プロジェクト名	期間	配分額(円)
看護学部・講師 山中 福子	高知県の血管病重症化予防に向けた看護職の知のネットワークづくりーICT（情報通信技術）の活用ー	H31 (R1)	500,000
研究概要			
<p>現在の日本では、少子高齢による人口構造の変化に伴い、社会保障制度の持続可能性の確保が課題となっている。また、人口集中により都市部と離島や中山間地域の医療格差も大きくなっている。そのため、地域の医療施設と専門医療を担う医療施設が遠隔診療によってつながる地域医療支援が行われ始めている。</p> <p>高知県においては男性の平均寿命が短く、壮年期男性の死亡率は全国平均よりも高く、その原因として糖尿病などの生活習慣病・血管病の治療中断やコントロール不良などによる重症化があげられる。2018年の調査結果から重症化には、社会的決定要因が影響していることが明らかになった。また、専門医療・看護支援が十分に提供されていないなどの医療者側の要因の影響も大きいことが分かった。血管病重症化に至る患者は、複雑な社会的・文化的背景からの影響が大きく、各職種の知を互いに活用し、スペシャリストとジェネラリストが繋がり実践力を高めていくことが重要である。高知県には、血管病重症化予防にかかわる看護支援として専門看護師・認定看護師・保健師がいる。しかし、各職種間や看護職とのつながりには距離的・時間的な制約があり、十分に交流できていない。</p> <p>そこで本研究では、高知県内の血管病重症化予防にかかわる地域・医療施設の看護専門職がICT（情報通信技術）によってつながり、知のネットワークを構築するうえでの課題を整理し、持続可能な知のネットワークのツールづくりを目的とした。</p> <p>知のネットワークには、①地域と医療機関における健康課題と保健医療の現状に関する情報共有と議論の場、②政策・制度に関する最新情報・スペシャリストが推奨する治療・ケアガイドラインの閲覧、③血管病重症化予防にかかわるジェネラリストとスペシャリスト間の相談・助言の場、④血管病重症化予防の看護実践知の体系化の場としての機能が必要となると考え、取り組んだ。</p> <p>本研究での知のネットワークとは、血管病重症化予防に関わる県内の看護職がつながり、相談、情報交換しながら、知の集積ができる場であり、ツールとは、ICTを用いた知のネットワークに用いるツールである。</p>			

研究 成 果

研究は、以下の 3 Step を実施した。

Step 1: インターネット回線を用いて既存のビジネスツールを組み合わせた知のネットワークツール (Ver1) の作成。

成 果: 知のネットワークツールとして、高知県内の看護専門職 (研究メンバー) と血管病調整看護師 (候補者) をつなぎ相談、情報閲覧・情報交換できる知のネットワークツール原案 (Ver1) を作成した。また、知のネットワークツールが機能するには参加者の IT リテラシーにあわせた説明、サポートが課題であることが明らかになった。

Step 2: Step1 で作成した知のネットワークツール (Ver1) を活用し、安全性・利便性・経済性の視点からの課題の明確化と修正を行い、持続可能な知のネットワークツール (Ver2) を検討。

成 果: Ver1 を活用する過程で【〇〇病院内チャンネル】を追加設定した Ver2 によって、院内の連絡・活動を推進できた。また、ICT を用いる際のサポートに必要な内容が明らかとなった。持続可能な知のネットワークとしては、ネットワークの構造に課題があり、Step 3 で検討していく。

Step 3: 最終評価を行い、課題の明確化、改善 (Ver3) COVID-19 感染拡大のため、実施できなかった。

結論

ICT によって目的に掲げた 4 つの機能 (①~④) をもつツール設定は可能であることが成果として明らかになった。課題として以下の 3 点があげられる。

1. いつ、誰が、どのように情報発信するかという具体的な構造づくり (機能①、②)
2. ツール上のつながりではなく、利用者が人との交流を感じられること (機能①、③)
3. 利用者に IT リテラシーにあわせたサポート体制

また、持続可能なネットワークのツールづくりにおける課題としては、フリープランのツールで持続できる可能性があることが明らかになった。しかし、参加者が継続利用したいと思える価値や目的を知のネットワークに持たせることが課題として残された。この課題は、血管病重症化予防の看護実践知の体系化の場として実践知を集積するうえで取り組むべき課題である (機能④)。